

# 看護学生のキャリアレジリエンスに関する調査研究

## Research on the career resilience of nursing students

高橋慶彦  
(教育学領域)

### 1 問題意識と目的

年間約5万人の新規看護師資格取得者を輩出しているが、病院勤務の看護職員就業数は毎年2万人～3万人しか増えていない。これは、新規看護師資格取得者の7.5%、常勤看護師の11.0%が離職しており、5万人の新規看護師資格取得者が就職しても10万人の看護師が離職していることで、実質の2万人～3万人しか増えていないという状態になる(日本看護協会, 2016)。新規看護師資格取得者では「現場で求められる能力のギャップ」、「精神的な未熟さ、弱さ」、「職場風土」など、ネガティブな理由が上位を占めている。夜勤による過労や、責任の重さなどから精神的ストレスが大きく、心身ともに良好な健康状態を保つことが難しいこともある。新規看護師資格取得者ではそのストレスも多大なものとなり、就職1年以内に離職してしまうケースが多い。こういった困難な状況に適応する、乗り越える力として「レジリエンス」という特性がある。

精神医学や心理学、医療業界等で使用されるレジリエンスは「精神面における回復力」に焦点を当てた概念であるが、キャリア形成に特化したレジリエンスとしてキャリアレジリエンスがある。キャリアレジリエンスとは、アメリカの心理学者Londonが1983年に提唱したキャリアモチベーション理論の中で初めて登場した概念である。キャリアレジリエンスの定義は、研究者によって定義や構成概念は異なる。例えばLondonは、1993年にも「環境の変化に適応する力」と定義し、キャリアレジリエンス尺度の作成している。日本でも近年、キャリアレジリエンスに関する研究が行われている。児玉(2015)はキャリアレジリエンスを「キャリア形成を脅かすリスクに直面した時、それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性」と定義し、社会人300人を対象に調査を行い、キャリアレジリエンスを測定する尺度を開発した。その結果、「チャレンジ・問題解決・適応力」「ソーシャルスキル」「未来志向」「援助志向」という4つの構成概念が確認された。坂柳(2016)はキャリア教育における「生き抜く力」を、「変化する社会のなかで、困難な状況にあっても、それを乗り越えて、自分なりのキャリアを創造していく力」と定義し、キャリアレジリエンスの用語を

互換的に用い、キャリアレジリエンス態度・能力尺度(CRACS)を開発した。キャリアレジリエンス尺度は「自己肯定」「援助関係」「楽観思考」「将来展望」の4つの下位尺度からなる「キャリアレジリエンス態度尺度(CR-AS)」と、「自己発揮能力」「人間関係能力」「問題対応能力」「将来設計能力」の4つの下位尺度からなる「キャリアレジリエンス能力尺度(CR-CS)」によって構成され、この尺度には十分な信頼性と妥当性があることが確認された。

看護師において、キャリア形成やキャリア教育に関する書籍や論文も増えてはいるが、そのほとんどが資格取得した看護師を対象としたものである。また、キャリア教育の研究が進められるなか開発される尺度は、一般科の大学生を対象としているものがほとんどであり、職業選択・決定などで明らかに違いがある看護大学・看護師養成所の学生を対象としたものはあまりない。さらに看護学生に焦点を当てた研究はまだ少なく、あってもそのほとんどが職業選択や、職業準備についてであり、自身のキャリア形成やキャリアレジリエンスについての研究はごくわずかである。田中(2010)は、「看護基礎教育は看護学生を看護師としてのキャリア成熟と職業的アイデンティティの確立のためのプロセスの初期段階」としている。また同研究から、看護学生の職業的アイデンティティの確立への示唆や、学習への意欲の高さが結果として示されている。職業的アイデンティティが、一般科の大学生と比較して高いといえる看護学生が、看護学生という立場の時点でどれだけのキャリアレジリエンスを持っているのか、また看護学生がもつキャリアレジリエンスに影響を及ぼす要因が何であるかを知ることは、学生への指導・介入のタイミングや方法を検討する上で重要となる。看護学生時にキャリアレジリエンスが高いからといって、看護師になったときもその力を必ずしも発揮できるとは限らない。しかし、現段階でどれほどのレジリエンスを持っているかは、今後のレジリエンスに大きな影響を及ぼすと考える。

### 2 研究の方法・対象

調査を実施するにあたって、仮説①「キャリアレジリエンスが高い学生は、看護一体感が高い」、仮説②「大

学生活に充実感をもっている学生は、キャリアレジリエンスが高い」という2つの仮説を立てた。看護師に求められる能力、そして態度の側面から学生のキャリアレジリエンスについて知るために、坂柳ら(2017)が開発した「キャリアレジリエンス態度・能力尺度(Career Resilience Attitude Competency-Scales: 略称 CRACS)」を使用し、さらに看護師という職業にどれだけ一体感をもっているか、大学生活において不安要因となるものは何か等を調査し、キャリアレジリエンスとの関連を検討する。

#### 1) 調査の対象

本調査の対象は、G県S市にある私立医療系大学の看護学科1年から4年生までの計331名とした。回答者の内訳は表1に示す通りである。質問紙を用いて調査を実施した。対象者全員に調査の概要を説明書として配布し、かつ10分程度の時間を設け口頭での質問を行ったのち、回答して頂いた。

表1 調査対象の内訳

|     | 男性 | 女性  | 合計  |
|-----|----|-----|-----|
| 1年生 | 8  | 73  | 81  |
| 2年生 | 13 | 82  | 95  |
| 3年生 | 13 | 65  | 78  |
| 4年生 | 12 | 65  | 77  |
| 合計  | 46 | 285 | 331 |

#### 2) 調査の時期

本調査の質問紙の配布、回収は、平成29年9月下旬から11月上旬にかけて行った。

#### 3) 調査内容

①入学動機②キャリアレジリエンス能力尺度③キャリアレジリエンス態度尺度④看護師一体感⑤大学生活充実感尺度⑥不安要因の、計76項目で質問を構成し、すべて5件法を用いた。

キャリアレジリエンス能力尺度の信頼性分析を行った結果、「挑戦力:  $\alpha$ 係数=.789」、「構想力:  $\alpha$ 係数=.764」、「協働力:  $\alpha$ 係数=.735」であった。キャリアレジリエンス態度尺度は信頼性分析の結果は、「自己肯定:  $\alpha$ 係数=.819」、「援助関係:  $\alpha$ 係数=.773」、「楽観思考:  $\alpha$ 係数=.809」、「将来展望:  $\alpha$ 係数=.830」であり、両尺度とも満足できる水準にあった。看護師一体感は、現段階でどれだけ看護師という職業に対して一体感をもっているかを知るために用い、信頼性分析については、「 $\alpha$ 係数=.911」であった。坂柳(1997)の「大学生活充実感尺度」を用い、信頼性分析については、「 $\alpha$ 係数=.872」となっており、満足できる水準であった。

### 3 結果と考察

本調査の結果では、男女による比較を行い、男女間の差やその傾向に注目した。

#### 1) キャリアレジリエンス能力

「挑戦力」において、下位項目「①新しいことにチャレンジすることできる。」に関して、それぞれの平均点が男子4.13点、女子3.66点となり、5%水準で有意差がみられた。このことから、「新しいことにチャレンジする」という挑戦力について、女子よりも男子が高いということが考察される。それ以外の下位項目では有意差はみられず、挑戦力全体での有意差もみられないため、男女ともに同程度の水準の挑戦力を有していると考えられる。「構想力」「協働力」については、男女間の平均点の違いはあるが、尺度レベルでの有意差はみられなかった。

#### 2) キャリアレジリエンス態度

「援助関係」の下位項目「⑥自分のことをわかってくれる人がいる」において、各平均点が男子学生3.80点、女子学生4.12点となり、5%水準で男女の有意差がみられた。このことから、男子学生よりも女子学生の方が、自分のことをわかってくれる人がいる、または、わかってくる人がいると感じていることが考えられる。「自己肯定」「楽観思考」「将来展望」においては、男女間の平均点の差はあるが、キャリアレジリエンス能力同様、尺度レベルでの有意差はみられなかった。

#### 3) 入学動機

入学動機を、「自律的動機」「他律的動機」「実利的動機」の3種類に分類し質問した結果、学動機のうち「自律的動機」の、男子平均点8.41点、女子平均点9.50点であり、5%水準で有意差がみられた。男子よりも女子の方が、看護学校に入学するという行動に対して自律的に考えていると考察される。それ以外の動機に関しては男女による有意差はみられていないが、男女ともに実利的動機の平均点が12点を超えており高い数値となっている。看護師が国家資格であること、卒業後の就職のこと、将来の収入面のことなど、入学する段階で自分の将来を考え、職業を選択していると解釈できる。自律的・他律的動機と比較しても高い平均点となっているため、「収入が安定しているから看護師になろう」など、実利的動機と自律的動機が関連するように、他の動機と関連している可能性が考えられる。

#### 4) 看護師一体感

項目「⑩看護師になれることに誇りをもっている。」「⑭看護について人と話すのは楽しい。」において、5%水準で男女の有意差がみられた。どちらも女子学生の平均点が高く、女性をイメージしやすい看護師という

職業や、学校では学生・教員ともに女性が圧倒的に多いことが関係していると考えられる。それ以外の項目に対して性別による有意差はないが、項目「③もう一度、進路選択の機会があっても看護師を目指す。」について、男女ともに平均点が低い。反面、項目「⑥もっと看護に必要な知識や技術を学びたい。」や、内容が類似している項目「⑤看護に役立つことであれば、他分野も学習したい。」についても、男女ともに平均点は高い。現状に対してある程度の満足感をもちながらも、看護師以外への興味・関心があることが考えられる。学習したいという動機まではこのアンケートからは読み取れないが、男女ともに高い学習意欲をもっていることが示唆された。

#### 5) 大学生生活充実感

項目 10 項目に対して、男女間での有意差はみられないが、項目「⑥今の大学生生活の過ごし方では、いけないというあせりがある。」に関して、男女ともに平均値が3を下回り低い数値となっている。看護師一体感では、学習意欲が高いという結果が示唆されたが、その点と関連し、もっと学習をしなければならないという焦りがある可能性がある。項目「⑩自分の大学生生活の過ごし方には、自信がもてる。」でも、男女ともに平均点が低い。項目⑥の、大学生活へのあせりと関連し、自分自身が送る大学生活に対し、自信をもてない可能性が考えられる。全体として、大学生生活に充実感を感じていると考えられるが、あせりや自信のなさがあることから、楽しいというだけでなく大学生として何をすべきか、学習のあり方などに対するあせりがあるのではないかと推測できる。

#### 6) 不安要因

表2は、看護学生が大学生活において感じる不安要因の平均点による順位である。看護学生として最も重要となる国家試験に対しては、男女ともに強い不安を感じており、男女間での有意差もみられ、女子学生がより不安と感じていると示唆された。臨地実習では、4年間の大学生活のうち、約8ヵ月間は病院や施設での実習を行い、かつ多重課題となりやすいため男女ともに不安を感じていた。この項目も国家試験同様、男女間での有意差がみられ、女子学生の方がより不安に感じている結果となった。全体的に評価や成績に関する項目が上位を占めており、離職原因でよくあげられる人間関係に対しては、あまり不安に感じていないと考えられる。

表2 不安要因

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1 | 国家試験                |
| 2 | 臨地実習における提出課題(看護過程等) |

|    |                     |
|----|---------------------|
| 3  | 定期試験                |
| 4  | 再試験                 |
| 5  | 就職試験                |
| 6  | 臨地実習に期間中の周りとの関係     |
| 7  | 授業の提出課題             |
| 8  | 他者からの批判、非難          |
| 9  | 人間関係上の喪失体験(死別、離別等)  |
| 10 | 授業料、仕送りなどの経済的問題     |
| 11 | 交友関係の縮小             |
| 12 | 交友関係の拡大             |
| 13 | アルバイトの調整(シフト等)      |
| 14 | グループライダーやサークル長などの役割 |
| 15 | 研修旅行や学園祭などの学校行事     |

#### 4 尺度間の関係

##### 1) キャリアレジリエンス能力・態度と入学動機

キャリアレジリエンス能力とキャリアレジリエンス態度では、すべての項目において相関が認められ、キャリアレジリエンス能力が高いと、キャリアレジリエンス態度が高いという結果が得られた。キャリアレジリエンス能力・態度と入学動機では、自律的動機とキャリアレジリエンス能力・態度の下位項目すべてに相関が認められた。他律的動機・実利的動機とキャリアレジリエンス能力・態度の相関は認められず、自律的動機をもって入学する学生はキャリアレジリエンスが高いということが示唆された。

##### 2) キャリアレジリエンスと看護師一体感

看護師一体感とキャリアレジリエンス能力・態度の下位項目すべてに相関が確認された。特に、キャリアレジリエンス態度の下位項目「将来展望」と中程度の相関がみられた。看護師という職業へのイメージには、きつい、汚い、危険という「3K」がまだにあるが、社会的需要の高さや経済的安定など、社会的評価が高いという面もある。その看護師になる、なりたいという思いが、自分の将来を前向きにとらえていると考察された。この結果より、調査するにあたってたてた仮説①「キャリアレジリエンスが高い学生は、看護師一体感が高い」が支持された。

##### 3) キャリアレジリエンスと大学生生活充実感

大学生生活充実感とキャリアレジリエンス能力・態度の下位項目すべてに相関が確認された。中でも、キャリアレジリエンス態度の下位項目「自己肯定」「援助関係」「将来展望」と中程度の相関が認められた。現在の生活に満足していることで、自分自身を肯定的にとらえることができる、その生活の中で他者と良好な関係性を築くことができている、自分の将来に対しても前向きに考えることができるということが考えられた。

この結果より、仮説②「大学生活に充実感をもっている学生は、キャリアレジリエンスが高い」ということが支持された。

## 5 結論

今回の調査では、看護学生を対象にキャリアレジリエンス態度・能力尺度 (CRACS) 及び、入学動機・看護一体感・大学生活充実感・不安要因を調査し分析をおこなった。その結果、次のように要約できる。

- ①看護学生は、キャリアレジリエンス能力下位尺度「挑戦力」以外に性差はなく、キャリアレジリエンス能力・キャリアレジリエンス態度のどちらも、男女ともに高い水準で有している。
- ②看護一体感は、キャリアレジリエンス能力・態度の下位尺度すべてと有意な正の相関をもち、看護一体感が高い看護学生はキャリアレジリエンスが高い。
- ③大学生活充実感は、キャリアレジリエンス能力・態度の下位尺度すべてと有意な正の相関をもち、大学生活に対し充実感をもっている看護学生はキャリアレジリエンスが高い。
- ④入学動機が自律的動機である看護学生は、キャリアレジリエンス能力・態度の下位尺度すべてと有意な正の相関をもち、キャリアレジリエンスが高い。
- ⑤看護学生にとって、大学生活に対し脅威となるものは、国家試験、臨地実習での課題、定期試験、再試験の順となっており、大学生活を継続できるかが関係する評価が上位を占めている。  
以上のことから、看護学生は、高いキャリアレジリエンスを有しており、困難な状況に対して適応し、乗り越える力を備えている学生が多いといえる。

## 6 課題

本調査では、特定の大学の看護学生に焦点をあて調査を行った。各大学や学部、学科によって教育方法・理念は違い、そこに通う看護学生の背景によっても調査結果は変わってくる。また、看護師は、大学だけでなく専門学校からも輩出されており、現時点において大学卒の看護師より、看護専門学校卒の看護師の方が多し。専門学校では、学校の管轄が厚生労働省となり、大学とは教育方法・取得単位数等が大きく変わるうえに、学生の背景や特徴についても、看護系大学間以上の違いがみられる。そのため、今回の結果は1つの私立大学での結果であり、全看護学生にあてはめることはできない。あくまでも、看護学生のキャリアレジリエンスを知るときの例の1つであるとしかいかいえず、全体化することは難しい。看護大学・看護専門学校の両方からのデータを収集し、その特徴を把握することが必要である。

また、調査結果の分析は、性別のみの比較とし、学年別での比較は行っていない。性別も、男子：女子の比率が約 1：6 であり、男子の人数が比較検討に有効な人数であったとしてもその差は大きい。より詳細に性別でみる場合、男女の人数比率に配慮する必要がある。学年別については、1年生から4年生までは混在する看護大学生の全体的な特徴だけでは、学年ごとによる違いが相殺されてしまう。臨地実習の経験の有無や、就職試験の経験の有無などによって、回答の傾向も変わってくる。看護学生のより詳細なキャリアレジリエンスの傾向を知るためには、性別だけの比較だけでなく、学年での比較も必要である。

### 引用・参考文献

- 小花和 Wright 尚子 (2004). 幼児期のレジリエンス ナカニシヤ出版
- 公益社団法人日本看護協会 (2017). 2016 年病院看護実態調査
- 児玉真樹子 (2015). キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発 広島大学心理学研究, 86, 150-159.
- 坂柳恒夫 (1997). 職業的不安と大学生活充実度との関係 愛知教育大学教科教育センター研究報告 21, 79-85.
- 坂柳恒夫 (2016). 小・中学生の生き抜く力に関する研究—キャリアレジリエンス態度・能力尺度 (CRACS) の信頼性と妥当性の検討— 愛知教育大学研究報告 教育科学編 65, 85-97.
- 坂柳恒夫・中道明弘・栗田裕二・早川美子 (2017). 大学生の生き抜く力に関する研究—キャリアレジリエンス態度・能力尺度 (CRACS) の信頼性と妥当性— 産業カウンセリング研究, 19(1), 43-50.
- 田中里美 (2010). 看護基礎教育におけるキャリア成熟に関する調査研究, 平成 24 年度 愛知教育大学学術情報リポジトリ
- 中央教育審議会答申 (1999). 初等中等教育と高等教育との接続の改善について <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm)>
- 中央教育審議会答申 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 株式会社ぎょうせい
- London, M. (1993). Relationships between career motivation, empowerment and support for career development. *Journal of Occupational and Organizational Psychology*, 66, 55-69.